

CRCニュース

産学連携共同研究センター

Collaborative Research Center NEWS No.14



学 長
澤 岡 昭

心の時代

心の時代今こそ心の時代であると叫ぶ理由は、IT(情報技術)の進歩によって、生(なま)の人と人とのつながりが希薄になってきたからである。人間関係に危機を感じたからである。

電子メールは本当に便利なものだ。私は宇宙開発事業団の研究統括リーダーを兼務しているので、電子メールがなければ、学長業との両立はとてもできない。どこにいても、朝の日課はメールを開くことから始まる。返事を書いているだけで、1~2時間

間はすぐ過ぎてしまう。

最初、丁寧に書いていたメールであったが、段々短くなり、数行で終わってしまうことが多くなった。返事が遅くなるよりはましと割り切って、直ぐに簡単な返信を出すことにしている。

移動すると、そこでまたメールを開く。この繰り返しで1日が過ぎてしまうことがある。電話で話することも少なくなり、仕事はかどるが、人間関係が無味乾燥になる一方である。

最近、いくつかの大学でインターネットによる自宅学習による単位取得の試みが始まっている。教育の基本はスキンシップである。ITが進歩すればするほど、寺子屋式の授業が必要になる。

せめて卒業研究だけは、学生と教員との触れあいの時間を多くもって、社会へ出てからITに振り回される忙しい毎日に突入する前に一生心に残る思い出を残したいものである。

この夏は受験生に「学長とメル友になろう」キャンペーンを行うので、iモードの携帯からのメールが沢山くるはずだ。楽しみにしている。10行くらいの返事を書くつもりである。

ITが進歩すればするほど一緒に酒を飲んだり、歌ったりすることが必要なのだが、一日中コンピュータとにらめっこしていると次第に寝るだけしか能のない人生になることに恐怖を感じているこの頃である。



INDEX

CRCニュース・14号 目次 『心の時代』特集号

心の時代
学長 澤岡 昭

松浦 均 助教授
「心の時代? 工学者の人間観を聞いてみたい」

曾我 静男 教授
「フーリエ級数・存在論的懐疑・新教育システム—ココロの時代三題断」

田中 裕巳 助教授
「『ココロ』と『からだ』」

水野 義雄 教授
「心を視る」

CRCからのお知らせ
「特許流通フェア中部2001」展示会 出展募集中
財団法人 科学技術交流財団
「研究交流クラブ 第59回定例会」のご案内

業務メニュー

共同研究・受託研究・奨学寄付金・研究助成金・共同実験室・技術相談・受託試験・インターンシップ・人材育成・知的財産管理

松浦 均 助教授

「心の時代？ 工学者の人間観を聞いてみたい」



本学では、「環境」「情報」そして「心の時代」という3つのキーワードを掲げて21世紀をスタートした。ここで「心の時代」とは具体的にはどんなことを指しているのか、漠然としていてわからないところであるが、それはもしかすると一人ひとりイメージするものが違う、でもさまざまなイメージの先には「心の時代」が共通に認識される、そういう類の概念なのかと考えている。

私はこの概念を「人間観」と置き換えて考えてみたい。本学は工科系の大学であるが、どんな「人間観」を持って研究をしているのか、工学者にとってこのことはとても大切なことだと感じている。たとえば、「ものをつくる」とき、できあがったものは、それを作った人の人間観が込められていると思う。そしてまた「ものを使う」人は、それに込められた人間観を読みとりながらそれを使う。そのとき作った人と使った人の人間観は共有される。そこから文化が生まれるのだと思っている。

工学者に限らず大学の研究者は、自分の意思で自分の研究を行う。次はどういう研究をやるのかと考えるとき、自分は今までどういう研究をやってきたのかと過去を振り返る。研究歴を眺めてみると、それはまさにその人の人間観の反映と言える。もちろん一貫した人間観を貫いてきた人もいれば、途中で方向転換し紆余曲折を経てきた人もいるであろう。しかし、いずれにしてもそれはその人の人間観である。たとえば私は心理学者であるが、自分がやさしい人間ではないので「やさしさ」って何だろうといつも考えている。やさしい人間でありたいからだ。心理学者のなかで不安で仕方がない人は「不安」を研究している。交通事故を憎んでいる人は「事故のメカニズム」を研究している。自分を知りたい人は「自己の概念」を研究している。いろいろな研究があるけれど、「人間はこんな生き物」なんだということを知りたくて研究をしている。そういう意味で各自の研究には必ずや人間観が反映されている。

ところで、工学者の多くは実は心理学者ではないかと私は思

っている。心理学者は内弁慶だからなかなか外界に出ていこうとしないけれど、そのくせいつも外界を羨ましく思いながら見ているのだ。工学者の多くは「心理学に期待しているよ」とメッセージを送ってくれるけれど、実は既に工学者が心理学者を兼ねているのである。なぜなら、工学分野におけるプロダクトはそのほとんどが人間が標準になってるのであると考えるからだ。つまり「ものをつくる」には人間を知らなければならない。さらに言うと、子どもがそれ使うのなら「子どもはどんな人間か」知らなければならない。私は左利きなので専用の道具をいくつか持っているけれど、「左利きの人」を知らなければそういった道具は作れない。逆に身障者を知らない人が作った身障者用の道具は不評を買って、生産まで至らなかった話を聞いたことがある。つまり人間を知る研究を経てプロダクトが生まれ、工学研究は、すなわち人間の研究なのだと思えるのである。

だからきっと、聞いてみるとたくさん話が出て来るに違いない。工学者が持つ「人間観」を聞いてみたい。いろんな人間観が聞けるに違いない。「どうしてこんなものを作ったのですか?」「どうしてこんな研究をしているのですか?」。その答えはすべてその人の「人間観」の表れなのだから。



曾我 静男 教授

「フーリエ級数・存在論的懐疑・新教育システム ——ココロの時代三題噺」



毎週月曜日午後、学生相談の担当をしている。私のところへ相談にやってくる学生の心の悩みは、ほとんど進路や学業に関するものである。ごく最近の相談事からプライバシーに配慮しつつ2件。

就職活動で少しくたびれた気配の4年生の相談。彼、「今まで5社受けて全部ダメでした。ドウショーウモナイデスヨ。また企業説明会で探して受けようかと思っているんですが、氣力が

・・・」。私、「どうしてダメだったと自分で思うのか説明してごらん」と自己分析を促す。彼、「面接がダメなんですヨ。『フーリエ級数』、『ラプラス変換』、『電圧利得』なんか色々質問されて、ナンカドココカデ聞いたような気がするんだけど、説明はできないんですヨ」。私、「でも何かは答えられたのでしょうか?」とフォローする。彼、「分かりませんと八

ッキリ答えました、自己アピールの方は得意なんですヨ！」。私、「ムウ!!」(君のこの4年間はいったい何だったんだ、とココロの中で呟く)。

もう1件、こちらは目のギラギラした、きれいな茶髪の長身の1年生、退学するかどうかの相談。彼、「ここでガンパロウと思って入学したのですが、最近ここにいるのが疑がわしく思えてきて・・・」。私、オオ、存在論的懐疑か、得意な分野だと思って「理由は何なの?」と尋ねる。彼、「授業がことごとく簡単すぎるのです。退屈な時間の後、ようやく面白い問題に差しかかるかというときに、授業ではそこは飛ぶんです」と科目名をいくつも挙げる。私、「ムウ!!」。続けて彼、「大学に入る学生には3タイプあると思います。勉強したくて入学するやつ、就職のために入るやつ、ただ何となく入ってくるやつ。ここの大部分はウンヌンカンヌン。」私、身を乗り出し、役割を忘れて「君のような人には是非、本学に残って勉強してほしいんだ。君の期待に添う立派な先生も多いんだ・・・」と説得にまわったりする。

本年度から新しい教育システムを立ち上げた。一言でその特徴をいうなら「勉強せざるをえないシステム、勉学する快楽を

味わえるシステム」である。このシステムは、みんなでココロを吹き込み徐々に完璧にするという条件付きで(つまり一生懸命教えざるをえない教育システムでもあるということ)、近い将来、上のような2者に象徴される者たちを生むことのない効果を発揮するだろうと考えている。期待して下さい。



田中 裕巳 助教授

「ココロ」と「からだ」

神戸の酒鬼薔薇聖斗の事件の時も、今年の大阪教育大学附属池田小学校での児童の大量殺人事件の時も、人としての「ココロ」のゆくえを問う大合唱が起こりました。人間の「ココロ」に何か異変が起こっているのではないかと。

私はこの3月まで、名古屋大学教育学部附属中・高等学校で、社会科の教師をしておりました。大阪教育大学附属の池田高校には知り合いもあり、同じ国立大学の附属学校として、大学と附属学校、附属学校と保護者との関係など、事件後の学校側の対応(教職員の苦悩)が、まだ我がことのように想像できます。

私の附属学校での教育実践の一つに、総合学習の開発があります。附属学校で25年前から取り組んで来たもので、来年度から新学習指導要領に基づいて、全国の小中高で実施される「総合学習の時間」の先駆の一つであったと自負しています。

附属学校時代の最後の数年は、総合学習の開発と言うよりもむしろ、総合学習と既存の教科の授業をどう結びつけるかという課題に関心が移っていました。一つの試みとして、高校の保健体育と倫理を結びつける授業(「ココロ」と「からだ」のつながり)を試みました。当然のことながら、保健では「健康」が至上の価値であるのに対して、倫理では生老病死が「善く生きる」こととの関係で問われます(仏教に限らず)。ターミナル・ケアに焦点を絞って、「生老病死」の次のような観点での受容こそが課題であることを生徒たちとともに確認しました。

Health(健康)の語源のHolesには、Heal(癒し)の意味とともに、Whole(全体)の意味があります。

「癒し」としてのHealthが人と人との「つながり」の中で実現されることを意味するとともに、一人の人間を「ココロ」と「からだ」の全体としてとらえる思想がHealthであるとも言えるのでしょう。

「ココロ」のゆくえを問うということは、同時に、「からだ」がどのように蝕まれているか、粗末に扱われているかの問いでもなくてはならないと思います。



